

所蔵 新日本古典籍総合データベース

書誌 ID : 100220229

DOI : 10.20730/100220229

コレクション : 広島大学図書館 マイクロ収集 大国 2306

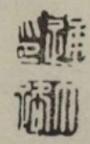
分類 : 読本

<<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100220229/viewer/1>>

興起其良心則得益不鮮  
 有作者之苦心而後可知也  
 勿為尋常無根之談而見之

庚申桂月

香坡處士



浮田傳五郎正晴妻  
 榮戶

浮田傳五右門之長子  
 浮田為十郎正通

左子辰義氏不切三末二口會



佐野の羽清之助安之助  
 二男

佐野鹿十郎清章

後二浮田傳五右衛門奴僕鹿藏



音川家之大忠臣長盛藏人常則

音川家之嬖臣橋元進之助

佐野幸義之侍

宝文堂

佐野幸兵衛 赤穂浪士 巻之参



繪本佐野報義録初集總目錄

○卷之壹

一回 佐野鹿十郎武藝出精ある話

二回 佐野鹿十郎狂乱家出奔の話

○卷之貳

三回 浮田傳五右衛門旅中狂人を救ふ話

四回 大館橋悪討浮田爲十郎難儀の話

○卷之参

五回 長盛藏人仁討浮田爲十郎助くる話

六回 大館意赴を會て浮田を殺害する話

三才図會 巻之参 目録

○卷之肆

七回 ○鹿藏の義心浮田敵討の供に立話

八回 ○浮田主從御職蒙りて敵討出立の話

○卷之五

九回 ○柰河三左門約と寢どて大館と電を話

十回 ○柰河奸計と逞くと民助鹿藏入牢の話

通計十回初集目錄了

繪本佐野報義録初集卷之一

一回 ○佐野鹿十郎武誓出精るま話

夫中古心永年間に於りて古今未曾有の大獲能あり。茲小介濫觴と尋ぬるに九州肥後八代の大守菊池肥後守武胤と云る小頃無双の良將御在ける。此菊池殿の藩臣の裡に佐野出羽介清安と云て俸禄二万八千貫と賜ふ菊池四老職の二個あり。最も文武両道の達人にて勲忠拔群の武士也。此清安に兩個の男子あり。長子に佐野主水清國と呼。舍弟に鹿十郎清章と号り。同胞共に父の器と絶て頌る。戈敏澤量の壯士にて心永三稔の頃に主水ハ齡二十一才。既に父の家督と相續せり。父子君用と勉められしが。舍弟鹿十郎ハ齡十八才。

次男トモされ子こ舎住やぢにて未なだ役やく禄躬ろくこうに具あらば天凛てんりん大剛たいこう膽勇たんゆうにして年九  
才さいの頃ころより父ちちに乞こて疾はやく師しと索もとめて劍道けんどうと学まび二万にまん八千はっせん貫せんの息男そくなんされ  
巴は笈じく習じゆ扈こ後ごと相人あひてとあきり余躬そのこと責せめて懈よこ怠ろあく。執と旨し古こ出しゆ精せいあ  
りけるに實げ構せん櫃ぐん三さん葉はより芳かんしく。後世こうせい名な譽よの勇士ゆうしと成なるべき。氣き象しやう會くわい  
ミ一い少年せうねんかれ。總そう二年にねん計けいりの極けい旨し古こにて余師そのしの流りう美びの奥おく儀ぎと得える  
り是これ彼かの八重やえ垣がき流りうと云い傳つたふ父ちち清安せいあんも鹿しか十郎じゅうらうの器き量りやう俺おれ子こあがも  
深ふかく感かんじて季す頼たの母もしく思おもはるる。鹿しか十郎じゅうらうハ倍ばい勵れいとて自それ夫より武ぶ藝ぎ  
の師しも替かて流りう美び々々ざざと習しゆ練れんする。緯いと十一じゅういち才さいより十四じゅうし才さいまでハ十八じゅうはち番ばん  
の術じゆつも習あひ覚さへ諸しよ流りう悉しつく習あひ得えて夫それ々ざ奥おくと極きよくめり。や余間そのあひだ  
文筆ぶんひつの極きよく旨し古こを。十四じゅうしの晚ゆふより十六じゅうろくの夕ゆふまで。兩年にねんの入い木ぎ道だうに入いて。

文武ぶんぶの両道りやうだう熟練じゆくれんせりと夫世間それせけん幼童こうどうの習あひ處ところハ多く文ぶんと前まへに学まびてよ  
り。他た藝ぎ後ごに学まぶと例れいとも此この鹿しか十郎じゅうらう西さい己じハ然しからば武家ぶけに生なる目的めいの弁べん  
意いハ尹馬いんば鎗しやう刀とうと職しやく分ぶんとして是これに暗くらけをバ士しと云いふ。文ぶんと以もつて人ひとと訓しんゆる  
ハ治國ちこく泰平たいへいの矩則こそく之の劍戟けんげきと拿とりて敵てきと打うち暴虐ぼうぎやくと制せいする職分しやくぶんハ  
農工商のうこうしやうの謀ぼうけと等ひとしく。俺おれ苟なくも佐野さのが次男つぎなん之の那なぞ武藝ぶぎ言い  
疎略そりやくせんやと憤ふん勵れいして父ちちに斬きるろ。恚いかの如ごとくに前後ぜんご異いふ一人ひとりの録りよくハ  
ぬ。象しやうと示しる。九才くさいより十四才じゅうしさいまでハ余術そのじゆつ得えるも古今ここん例れいあく。菊  
池いけ一いち藩はん中の評伴ひやうばんと成なりて佐野さのが奇子きこと賞美しやうびせられぬ。干時かんじハ永  
三年さんねん三月中さんげつちゆう南暖なんぬん和わの時候じきゆうに向むかふ物もの々ざ八代やちだい城府じやうふの裡うちに於おいて諸しよ處  
の寺院じやういん神社しんじやの境内けいんハ櫻さくらの満花まんかに人ひと拳こぶり合あひて士農工商しのうこうしやう老若男女らうじやくなんにや

左并取義録物纂卷之二

二 宝收堂職

此期過さしとて這処彼処己が様々浮き出るに茲小八代城府坤の方  
澤田八幡宮と云社あり是ハ豊前國宇佐太神と遷一奉る御社  
と云、近曾社内に櫻木植て開花に諸人脚と運び俱に神徳を  
仰ぎけしハ佐野が身の家臣們も主水鹿十郎へ是と詰りて一日遊覽  
と勧めけるふぞ主水鹿十郎へ詰りて曰く你ハ多年武藝に傾き見に  
勝りて諸流と極め若年に稀ある上達ハ菊池家の譽言士と成絆父  
兄の躬にも太面目然るが過不及と云絆あり余り心の傲壞りて却  
て躬の病害と索むべし時にハ保養鬱散なをも是生命の二術と云  
堂櫻の満花俸僂の見物へ家臣們的勧めに忘らず矢八幡の頂  
拜兼て澤田へ遊覽に出結へ俺你と同道せんよりハ隨意も入氣

散らふめと兄の情に説勧めしハ鹿十郎ハ辱しと述て家臣十個を  
り従者とし主従羽織袴の着流しに若黨奴僕に小荷食菘  
乃途中の調度と齋して毛襪雨具の準備までと打擔させて身と  
出づ澤田八幡宮へ参詣し今と盛ハ櫻の下ある社内の程能茶  
店に憩ひ主従酒肴と把ひつけて花と瞻めて酔と竭せば了り得の  
鹿十郎と歸路と忘れ此花價千金と林へとり此時華表の方  
よりして十四五才の一個の少年衣服も垢着る古布子と躬小纏ひ  
る下劣の酌と一個の老筵介後に属て小き太鼓と打叩きいハ太  
濁る声にて云けるハ何方と諸見物御覽せ是ハ洛聖願寺精樂  
師或ハ益條河原毬園御社内に長らく御評件を蒙り侍ふ

一左平假名録勿染巻之

三



上芋妓の虎松と稟して高き処あれ刀利天廣き地あれ大千世界。手  
代足懸さへ持て則へ登り趨る絆ハ鳥の如く。或ひハ釵の端紐度り。務  
竹棒の端ハ御望も次身御見物の天窓端にても踏と御意さ(業  
る則へ一來法師の宇治橋あるねど飛上りて真逆立ハ虎松が根元ハ  
藝術早業。它般此九州へ罷り下り。洛土産の新工夫ある。六本釵の  
端度り。足駄一本齒と指ハ懸て且此処にて御覽に入る首尾駐度り  
謀せし則へ虎松へ御花と思し召てハ幡様の御棗錢残り。二銅三銅  
の投附福と夫と勢とて勉め侍る。平太夫本躬準備させん必  
む逆結ふると声懸つ。早四方群集と成けるふぞ茶店に有る佐野  
の王従も鄙珍しき心地あれ。是ハ一奥ある上芋妓を釵の端と歩行

三趾仕覚へる藝術ありん見せんと打談合て茶店の牙磨の前向み  
れハ群集の見物左右に除させ鹿十郎ハ袂首と立て。要月打懸つ見  
物もれハ家臣們ハ主の左右に食蹲踞て瞻せり。悉て上芋妓是  
ホに臆せども件ハ老筵ハ背負り。古き菖菘と打開きて刀六腰  
と拿し出し。百般飄戲と嗜り散りて小き木ハ切口と六並へ余真中  
の穴開処ハ六の刀と逆に立て。間二尺討り隔て並ぬ。備虎松に玉禪  
懸て右手に扇子と打開き要の方と向ふに拿て一本齒ハ高足駄  
と履。両足廣げて加するに躬輕き絆鳥の如く。続二歩の又先とむ  
次弟々々に加踰る。一本齒の足駄さへも寸分踏外さぬ。妙術諸  
見物ハ一度に声上て奇妙とと讚そや。孔方投打絆霞の如し。

鹿十郎も余妙術に感心する様大方あり。家臣に命じて青銅五  
鹿松父子へ拿せられ。鹿松は數度頂戴。頭を地に付て拜謝あり。  
鹿十郎感美とて云ける様。汝今日の世業早ら。是る茶店へ立  
入べき。俺別に汝へ処望あり。花へ追刻。惠もん。些疾く仕舞て來  
るべし。再余義もあ。憑け。家臣們。食面目注して。是若殿に  
ハ那思。召て。食同様。の早。的。別段。召給ふ。やと思ひ。あら  
余場の禁めん。奈何と思へ。食打列。茶店。入元の席。着て。稟  
け。殿御。一奥に侍ふ。れ。右下賤。的。再。忘御。招き。甚。外聞  
悪く。存。奉。殊。更。人。立。此。場。席。に。他。見。那。と。侍。ふ。や。願  
ふ。御。止。然。べ。衆。口。て。諫。め。け。鹿。十。郎。ハ。完。示。打。笑。汝。們。外

聞悪く。顧。ふ。俺。より。前。に。身。歸。へ。俺。彼。下。郎。と。招。く。処。ハ。善。術。の  
骨。法。聞。入。為。尊。卑。と。論。じ。て。道。を。聽。き。諸。善。俱。に。上。達。成。を。上  
辛。妓。と。雖。も。此。前。師。あり。師。有。則。必。法。あり。法。有。則。術。の。奥。あり。  
術。の。奥。に。必。妙。あり。余。妙。得。る。絆。難。き。哉。汝。們。渠。の。早。き。時。  
根。に。人。を。慢。る。絆。こそ。是。則。ち。僻。と。云。て。無。能。に。階。人。に。失。一。能。有。て。  
善。悪。の。論。を。必。き。に。有。も。然。捕。廷。尉。正。成。に。強。敵。尊。氏。公。と。逐。入。為。  
に。泣。男。と。謀。計。に。使。ひ。て。勝。利。を。得。られ。例。も。あり。上。辛。妓。と。雖。も。術  
の。奥。ハ。武。家。劍。道。の。奥。と。等。く。一。朝。一。夕。に。得。る。べき。に。非。も。切。差。琢。摩  
の。年。を。積。も。今。日。渡。世。に。到。り。難。う。惣。別。武。士。の。心。得。と。ま。る。劍  
道。柔。術。の。両。共。に。是。人。と。伐。而。已。の。処。為。に。非。も。已。防。ぐ。と。言。と。み

其縛諸流乃真大略然今進退の飛術飛行奮躬のころ一固と  
 上肯とも俺多年に習練まれども未だ飛術飛行の業を得ざり是  
 此皆已と防ぐの法にて須乎大難を急に臨む則平日之を熟練あり  
 んん死地と出る縛縛とぶくも上草枝の法に刃を度る今躬のころ  
 則ち是く渠多年の苦功を積りて纒十五文にて妙と極め已と過親  
 と養ふ縛非人と雖も手柄者一錢二錢の人を慈情も天の眞感に  
 領らまんへ入目に止りて恵むべし無禄無賤の下奴あれども業と興  
 して唇を過縛総て百事難くざるは汝們尊卑を論せざる之  
 を顔へ俺の処作の渠の出来も渠の処作の俺の出来も世界の縛縛  
 の如しと理義明うの説示しけしと家臣們の食感伏して却て頭を掻

て平伏し至極の命せと速て誤りたり。恁て作の上草枝へ由有氣なる武士  
 至從の招きに心急ませらる。早仕舞して兩個ともに茶店の裡へ來  
 り。小腰屈めて恁と告まへ鹿十郎、席を起出で端近く進んで兩個  
 小對ひ汝們渡世に服空しん茶店の亭主支度させよ。快く酒飯  
 救せよと。指揮に亭主畏りて別に外面の席に於兩個酒飯を  
 速与けまへ兩個大さに打敷ひて少刻食事に速びつ。就て手  
 れバ再び招きて鹿十郎、虎松に問ける様俺処望の條ハ余の儀に  
 あらま汝今日此藝術と視るに聊武道に眼と付る処有躬輕早  
 術の練摩に於ハ殆感心なる縛此も抑此抑昔古ハ数年習定  
 術已に得る処の自發の妙意も聽聞欲く恁別段に招きたりと。

打微笑つ尋ねけし、虎松此一面と上て那締御処望くと存ぞれば、  
僕の処爲極音古の次弟御尋ねを受て耻けし、是に侍ふ僕父に  
て則ち上草妓にて侍ふ僕四五才の刻よりして父懈怠多く羽目侍  
る且尔最初八逆立より負計りて習ひ懸念次に反博り股被き四肢  
の遣方伸縮に凡四年計り活業の中に父油断るく習ハせ侍ふ  
最も幼年ハ骨條血條も和らる故習ふに忘らぬ、躬の自由壞り侍ふ  
曲特中度りれ上草妓にハ右四年の裡に覺侍ふ備今日活業ろ  
外に羽翼と稟とて別に有ね、毎日諸見物の懐中、杖よ力よと思ふ  
而已と氣の張合に勉め侍れ、日極音古と云てハ仕らぞ、孔方儲けの場  
処仕損もまじと思ふ計り、極音古に侍ふ次に尔妙と稟せ、俺知を度

と重ねて昨日の仕平均悪き、締へ今日に躬平均直し侍りて一日々々  
仕合工夫と更仕越るく勉むる様に油断仕む侍ふ処、是や俺の  
が妙々と存、外に意味とて侍へども、那の締多く稟しけし、鹿  
十郎大きに感賞し、汝ハ返答妙論なり、万事懈怠多く勉むる締  
實上達の極意あるべし、然らば尔躬極早術と以、倘汝の不意と窺  
ひて汝と討ま、臨む則ハ平日習練の功と以、危急と遁を、締も有や  
と問、虎松答へける様、命せの如く僕にても、劍道不心得に侍ハ共術  
の徳にて危に臨むとも、躬と逆を、締ハ容易侍ふ君疑、く思召ハ木  
竹と以、僕と逆誦て打ま、く仕給へ、逆退さて御目に懸人併、ハ兵  
法に於ハ聊も心懸致さぬ、故僕過失て逆得ざりとも、討居結ふ、締ハ

用捨仕給へ小余ハ恐も奉らざと最丈夫に言放ちけしハ勇氣溢れ  
 一鹿十郎ハ之と聞より面自ぐりて那も時の一奥之たり。倅僥此茶店  
 の傍にハ廣き芝生の場処者受たり。俺と汝と逐競へして云が如くに  
 て遊ぐ。嘸面自ぐりと聞へけしハ家臣們ハ之を禁めて非人と相人の遊  
 び処爲こそ父君兄君へ聞へ悪く是而已ハ止まり給へと食声竊や  
 くに諫めけしども鹿十郎ハ向用ひも今日ハ俺遊樂の鳥ハ非除又  
 兄の御聞に達と共恩免の鳥に憚り有んや。管も止めあせそと言放ち  
 けしハ食詮方あく差扣へる。恁て鹿十郎ハ虎松の云に乗して茶店と  
 立出。場処と着繕ひて間數定め定間より外に踏出て外へくぞ  
 と約束ありて十個の家臣と四方に護らせ。細き竹を自ら掌に拿

虎松ハ那と持むに鹿十郎の後に屬て双方芝生の場に進入君御  
 准備能ハ卒逐結へと云つ脚も踏鳴して面賑然笑ひける。おぞ時  
 節。櫻見物の男女も上草妓と武士の人の那も。茲に爲ものありと  
 大勢立集ひて見物もるに鹿十郎も酒氣を帯て專奥深く浮  
 め。平と云つ竹振上て虎松に打懸り逐出せば虎松ハ両手と  
 打振余逐趨る。絆風の如し。限の間數に逐詰む。躬を翻して後  
 に趨り鹿十郎も脚に乗して逐絆滑り多く趨むとも。虎松ハ此  
 も討れむ。逼与逐詰しと思ふ時ハ傍の櫻の枝に飛着躬と逆に  
 して猿の如く得る。処の上草妓躬がりに鹿十郎が持する竹も  
 届き兼てハ討に討れを飛乱離と飛てハ趨り出まに。兀恁をそ

左 竹野 華 義 集 卷 之 一

一 室 文 堂 藏

縛二十四度さゝも勇氣の鹿十郎も逐趨るに息断んとて思ハ  
 も芝生に打倒れ多々家臣們の支り倚て息絶に茶湯を喫し  
 茶店の裡へ側引入見物男女の四方へ散り此時鹿十郎休息  
 て彼虎松と呼て云様實に汝の稟を如く飛術飛行駈き入る  
 へ俺自今汝の詞と師と。自責自励して術と字づ。自然の妙と  
 得づべき物。汝の鑿定奈何と問バ虎松答へてさん侍ふ物ハ官む  
 好むに上り根氣強弱に差別侍ふ君御壯年にて御在バ御心  
 懸の堅きに忘。急度御自得仕結ぶ。僕如きの評まる処慈  
 雀大鷲と誇るに似されど彼我經八艘飛の働きも天狗の助執を  
 受るに非も偏に術の妙にて侍ふ僕の上草妓を御覽して彼是

御賢慮有間欲と云バ鹿十郎礮と掌と拍汝の妙言感に堪ら  
 噫惜むらゝハ蒼齡あるに非人境界に躬と埋も縛近曾残念の  
 到りと頻に嗟嘆仕らうけとバ虎松ハ完示打笑ひて是ハ辱るまき申に  
 侍ふ併徳不徳ハ人間の形勢今日僕れ如き節も下さる処の菩薩ハ於  
 ハ君も下郎も変る縛あく。縮布襪褸ハ品異あれとも寒く暑と凌ぐハ  
 別に変む。目所ハ畳の薦席。成皿裏の夢ハ縛ハ五十年然而已樂  
 くと爲物侍も五斗俵の爲に躬と縛らるより足なぢられ世間過を  
 ハ結句に氣安く侍と口端利く吞けきバ鹿十郎倍感心と七圓  
 金一枝花と遣。終に暇拿とて去せざる早鳥も西に打傾けハ鹿十  
 郎ハ家臣と引卒。俺矛へと立歸りけり

二回 ○佐野鹿十郎狂乱家出奔の詒

然程に佐野鹿十郎清章ハ匹夫下劣の一言あれ共禿松の論辨と  
是として將渠の躬ハ早術に心憤勵し武藝に把て飛行の進退  
死地強敵を防ぐ要ぞと勇士の眼を付る格別ある自來の心緒に的  
中せし自是屢躬の早術の飛行の自學に執心して間なく時  
多く勵むける茲に菟池の同藩中の俸禄も同程不賜ハる真村  
大炊元房と云武士あり是も佐野同格ハ老臣之此人の子息臺  
藏とて鹿十郎同年の壯士有しが豫て明友の間あれハ両家共交  
加深く最疎意多く過しりが此臺藏も力量有て鹿十郎と時  
にふまてハ相撲もど取組力を競ふに鹿十郎ハ敵に倍する自然ハ

怪力得たる人故了得の臺藏も始終に負とり然るに頃日鹿十郎ハ  
頻に飛術を出情して勵む字ぶと視多物も力競べに打負りり平  
ふ心の嫉も懐け佐野飛術を執心るまこそ是究竟の謀計之熟  
く敷計て怪我与へぬ相撲の遺恨を晴まべし心密に計較けるよう  
一日佐野が牙ハ入來りて漁遊ハ同道奈何と云ハ鹿十郎ハ好しね  
と明友みれば勸めぬ心ト双方奴僕と二個宛卒て釣竿擔げて出さ  
ける城府些一打放とて良方に告りて八代川と云地処あり最も流  
也早く大河ハ名産八代鱧八代鯉ハ此川にて把と云ハ皆鹿十郎  
臺藏ハ岸の品石に要打懸つ釣針に餌を差添て流れに  
浮めて樂もとり頃も四月の上流されハ暖氣に川風も太快く少

左野報録初集卷之一 十二 室文堂藏

刻余念あく看へとけり。臺藏ハ心に一物有バ奴僕に卒と目注されバ奴僕も余計枝に組しとけり。故意居眠る客とあして前め川中へ真低伏に水煙り立て打閃り。臺藏大きに打駭さるる面色あして周章慌忙。奈何ハせんと立噪けハ鹿十郎も俱に駭きて溺死させぬ。不便くと余終衣服脱棄つ。一間計りの岸へ上より。躬と踊して飛込けとバ豫て臺藏ハ奴僕の酌言含め置物にや有けん鹿十郎飛入と視るより。水中にて無手と抱着深水の方へ扯入とも。佐野の奴僕も是を視るより。那く少刻も猶豫ばま主人の大事と思ふ物多。俱ハ九裸と成て飛入つ。至從水練得とりけとバ水と滑りて傍に近倚。鹿十郎抱き止めて浮り上らんと奇くけとバ奥村の奴僕ハ鹿十郎と向深

水へ扯入んと。双方左右へ組着奴僕と鹿十郎ハ躬と組もあがり。抜手と切て水と掻分。水上に浮り出ると等く奥村の奴僕ハ漢子の帯を斤隻に合手よと看へ。腕と伸して中に釣上臺藏殿よ受止結。必む怪我させ給ふると呼ひあがりに。一間計りハ高見と成る岸の上へ臺藏目指して投上りけり。臺藏ハ此大勇の処爲に心の奸計。翻語れ共奴僕の助けと上表に歡び心得ると声と懸て投上る奴僕と。丁ど受止。脊擲きて水と吐り。故意呵り懲りて看へ。くれバ鹿十郎ハ己が奴僕と浮むと等く遊がせつ。前の岸の方へ這上らせて。余躬ハ後より遊ご上れり。躬て双方躬と搦ひ。鹿十郎ハ衣服と着て。臺藏に對ひて。真小を様。當今水中にて心得難きハ。御邊の奴僕ハ漢子の菓集

と抱き留めて水上に浮まんをまに渠尚某と水底の方へ扯込ん  
とて浮ませむ某奴僕ハ扯上んとあま水中之処爲狼狽と思へ共  
助け入るる某あれば御邊の奴僕ハ死人も同前帝鹿十郎に  
打乗まき物う那謂深水へ扯込んとせしや一言問明め給る  
べし此怒りを含めて稟しけむ臺藏ハ心裡駭き恐と夫ハ  
六不届きある下郎の拳止那共侘仕るに詞あり怒し給へと誤  
り急に奴僕を打懲して汝過失て水中に陸込佐野氏ろ  
助けを得るが那謂水中にて躬の自由をまるや不埒至極と  
敦圜つ屢胸を以余意と知し疾々侘むやと言けむバ奴僕ハ  
一向地に平伏て水中狼狽上下と覺へも偏に御免恕仰き奉

ると躬と動して侘入けむ臺藏も俱に誤りけるふぞ鹿十郎ハ強て  
も外れも双方怪我あけむバ抜嫌と和らげ復遊も之と早くとて双  
方同道して帰りける臺藏ハ整へ処爲より奸計仕損じと頭れ  
と。奴僕に余罪被けしうら今日鹿十郎水中の働き高見の岸  
へ水上よりして人投上るる余力量に愈己る速に察して密に後悔  
して居けるらや然るに佐野鹿十郎に於て余鳥八代川より帰りて  
後猛可風邪の心持と打明けが忽ち惣身大熱往來し食事も  
止て熱氣に犯さむ只管幻言吐て病跡に卧ぬ父母同胞の人々深く  
駭きて臥室を離れ寝食忘れて看病するに己に半月計り打  
過る刻風邪の執ハ漸治りけるに此時よりして鹿十郎ハ父母同胞

左野取後録初集卷之一 十三 室文堂藏



の間も覚へず親族家人の誰某も知まぬ或いは怒り狂ひて人と逐ひ或いは  
 笑ひのめきて廻り廻り昼夜の分ちなく暴る程に身中上下男女の  
 輩は是は若殿にハ物の怪着し一暗痛痛ハ一やと肩と擽りめて食恐る  
 る中にも嘆きけし父佐野清安兄の主水六々一層の憂と懐き  
 て名医と迎へて診察乞ひ全く外邪の熱氣に誘引五臟博倒  
 して治らざ此狂乱の病とありぬ決て執陞ふて有むと云に尙余医  
 療急りありが鹿十郎天凜膽勇あれれ鬼角に刀鏢長刀と金毛  
 打晃くして暴人とするに父母同胞ハ大きに恐きて総て武器の類と  
 秘し収め昼夜五個宛家人と附添音外面に飛出んとするを守  
 衛と届て把鎮めたる二時父母兄三個の人々ハ鹿十郎の傍に寄

集ひ父清安静ふ諭して曰く汝坊々も吾矢の家に生を四民ハ長る  
 躬ハ有る狂念発して人事を忘る父母同胞とも辨せざるハ武士の  
 躬ハ耻しき穢之況や菊池肥後守殿藩臣佐野出羽介の孩児み  
 らまや汝九才より劍道に傾き諸流悉く奥と極め人の賞誉に懸り  
 一躬にて一心純に病の爲に博倒るもそ見苦しけし且耻心と押鎮  
 めて往事勘辨ハ付ざるにやと云慈母秋篠と云も諭して曰くやよ鹿十  
 郎耻聞ねし一妾ハ休と産儲ける慈母秋篠にて侍るぞよ是は在ハ  
 你ハ兄も主水清國と耻知より二万八十貫の家産は狂乱狂人と  
 成果てハ弟一大守ハ不忠あるぞ次にハ父君ハ不孝く慈母や同胞ハ耻  
 辱と受て家人の的にも笑つべし武士ハ物に動せぬ人劍と以塊と呼ハ你

余病敵と退治さるべき意の劔躬小添るる今慈母の詞触る解して病  
腦自ら除ひ結へ之恩愛切ある心と竭して詞静に説聞ゆれ共鹿十郎ハ  
耳にも入む嘲笑ひつて父母と賄付汝們ハ乍麼那方の的を俺ハ佐野出  
羽介二男と鹿十郎清章ハ俺絆之武道の弓馬鎗刀に於ハ得  
そ人に負まき武士多と那論せんそ面向るそや座と跋巡やつと敦  
圍けれハ父母同胞も只長嘆して専愁ひに沈み入り。是俺に勇氣拔  
群の天瘡より物に徹堅む心乃勞にて引出しる病症なれば頭に治  
まき空子も看へも帝医薬の外ハ加特祈禱。神佛冥助を願  
ひとりける儲も奥村臺藏ハ鹿十郎の狂乱と聽より心蜜に打突  
ひて一日余病氣見舞として佐野が身に入來り余病室に打通

りて附人に容乎と問ふと。別づ疎意と断りけむ。鹿十郎ハ臺藏と  
看て大きに怒りて丁ど賄付汝俺と八代川にて溺死させんと謀る処ハ  
奴僕の処爲にて明白に察那面目有て俺目條りハ推泰致せりこそ膽  
太し尙カづくろ勝負と望まハ俺項日腕ハ疼く最中へ投殺して得  
させべきやと罵も敢ぞに飛懸りけむ。家臣ハ附人把支ゆらに鹿十  
郎ハ食刎飛して臺藏ハ襟髮搔掴めて引被きて三間討り室ハ  
紙門ハ際へ投着たり。固より無双の大力の上に狂氣力や加りたりけ臺  
藏ハ豹子と投らる如く眞計と打て倒を伏要時ハ起せ上らざりけり  
此時兄主水ハ趨り出て急に臺藏を助け起し百般勸り俵て云様是  
存外の無礼仕り侍ふ方亡愚身病者に免じて慮外の狼藉

怒させ結へと低頭をして誤りけは、臺藏ハ健腰骨打て頬を皴面て  
痛くそ忍び急に起縛得ざりけは、主水ハ己が轎の裡へ臺藏と助  
け乗て自ら轎に属て同道し、奥村の茅に趣きつ、大炊元房、樽  
未と語り、段々俚言述て誤りけは、元房も病者の処爲ゆ憤りも  
あく會釋して、主水ハ無事に立帰りけ、實鹿十郎、狂乱と雖、臺  
藏の奸計と心の底に深く憤り居け物にや、狂念より、介向と看  
て、正氣あふねど怒りと発し、自然と怒と晴しける、緯、臺藏而已  
心に思ひ的り、渠奴狂氣と偽にして、實ハ病小託け此、鬱憤と俺へ  
報せし物あらんと、独心に恐ま居ける、尚鹿十郎の容子を聽に  
狂乱と追て倍烈しく、頃日ハ室に竹竿と設け、些外へ出さばと云に

臺藏も茲に到りて、原來實姓狂氣なり、併俺奸計と察す、居緯神  
通得たる、才子とて古と動ひて感ドけるとぞ、然程に再佐野が家に、鹿  
十郎の狂病強くて、上下共に特餘しけ、六、終に竹竿と構へて、嚴く  
閔菴二便所、処も裡に整へ、三度の食給仕として、主水自ら膳部と  
運び、食物、毒撰と敷止、別々父母の愛子ある、故兒も両親、孝行  
の爲に多くれ、召仕ひも打任せ、勉めて結仕せられ、六、兄の至實通  
づ、処り、狂念暴行の鹿十郎も、食事に對へ、大人しくして、介言緯而  
己、差ひけきと、平ひ狂、処爲せざりけは、六、兄の主水ハ、諸老實に、小兒へ  
物と食まが、如く心媚しと、押擬ひけは、六、兄に對ひて、ハ、焦る病者も、大ま  
に、遠慮して、容神妙し、主水一時、鹿十郎に對ひ、你、能俺と、バ、知りや、下

鹿十郎と誰と看給すと云鹿十郎主水の面を瞻みて御邊ハ則ち人間  
と思へりよもや妖怪變化にて有ま。主水破乱々々と涙を流し。竹骨肉の  
兄と看忘ま父母とも忘れハ那縛ぞや。今年纒十八才にして。武名世  
に拳べも答あるに世の癡人となるハ浅猿けは佐野の家に生れ來る  
が。父母同胞と看忘れて。未代俺家の耻辱もぞ迫てハ親同胞の  
分別にて心靜めて思慮せよう。と言棄和らうに喻し聞ゆれば鹿十  
郎ハげくくと打笑ひ夫ハ稟さる筈も侍も凡生と一活る前にハ父母の  
無的ハ侍も。二人信有ハ四海兄弟の如く。信無ハ兄弟芽他人の元  
鹿十郎にハ佐野出羽介と云菊池一老臣の父侍ふ子として。父母  
同胞と忘る。的争世界に侍ふべきやハ主水大に飲びて曰く。你余正

氣と心に覺へよもや俺と看忘れま。鹿十郎再答て曰く。御邊ハ俺と  
云月結ふ慈母秋蔭様にて御在。夫やく澤田ハ幡宮にて看つる上辛妓  
の虎松あらん汝一本齒の足駄と履て鉄の尖とハ別越る。奇妙の術こそ  
目覚し。辛々此処にて俺に看せよ花遣つもべ。と云け。主水ハ声放  
つて打哭つ。二言の問答多く座を立ち。此為侍に父出羽介夫婦ハ途方  
に莫くて哭外ハる。或時ハ竹宰の裡にて。独踊り刻て飛步行元來  
好る飛術の執心此時までも止縛る。と牽裡暴迫りて家鳴あせり。附人  
の家臣ハ四方に衛りて損むる処ハ修覆を加へ。迷惑云様も有ざり。頭  
も心永三年の冬十二月三日の夜の縛あり。今夜ハ別て風雨烈々  
戸障子までも鳴悶きて物音凌ども夜と成けるに附人們も雨夜の

左野 奉美 初集 卷之一



鹿十郎狂  
 ようして  
 佐野出羽  
 の家と風雨の夜  
 に紛て狂ひ出る

鹿十郎狂

絆ゆ多く油断あして熟睡しり。鹿十郎ハ狂氣の心より。此物音に咬さる  
けん。忽ち怒氣発して狂ひ出。得る躬輕く早術以竹格子に脚  
懸て天井板と打外し。二階敷を刎傳して。衝と飛上りて窓の方のう  
まい柔心く引破り乘。小家根傳ひに地不飛下り。牙脊戸方此高藪有  
と打潜りて走出。二條の流の堤不上り。東を指て脚に任。狂氣  
の物宅もあ。余躬ハ雨風にひと濡て愈肝氣搦とも病の毒も俺ハ  
氣着ぬ闇の礫。生得勇烈の壯士もれ。支るを面白くや思ひたりん。  
天に趨まる雲の行方と共に定めぬ落着所親同胞の後れ嘆きも。  
夢幻ある病の仇に逐も逐も夜の道と終夜息も絶もふまりたる  
が既に十里余り葛り行に茲も同國隈本の郷る。志水と云る属村

まで到る共知も着けども己ハ絶て那里と覚へて余躬も太く勞れり  
けん。志水の村梢落の郊原にして。礎と卧倒して地を枕と。高軒擡て  
卧居たりける。噫是奈何ある因縁ぞや。筑紫余名家菊池の藩臣。二万  
八千貫の老職佐野出羽介の次男と生。數君家臣の主將の躬も。  
病の処爲に家と奔りて。茲に野外の巷に卧と。昨日の榮花今日  
の更々落一夜に貧福処と異に。幸不幸の様天命と雖と諦め難  
き傳未にもむむや。早竟鹿十郎が後の躬の上奈何ある話に到るや  
否や夫ハ次々の回に説分べし

繪本佐野報義録初集卷之一

六國  
2506

繪本佐野報義祿初集卷之二

三回 淳田傳五右衛門旅中狂人と救小話

却説佐野出羽介の身に上下倦と夢も氣着ぞ翌朝兄の主水に  
 鹿十郎へ朝飯と喰せんと介別室へ來て視れば是ハ奈何竹格子の裡に  
 天井板二階敷落重りて主ハ空蟬の後も留めど風雨ハ既に鎮りされ  
 共呼と答も音も無りき主水ハ仰天慌忙して番に属する家臣と呼立  
 遽しく尋ね問けるに食齋敷く而已探も外也。急ぎ二階へ登り向ふ  
 と看れば窓のうまい引放ちて脱出さ様着ふくまは食々是ハ奈何せん  
 と狼狽廻る主水ハ憤然と罵りて曰く汝們主命と疎略にして活者  
 の番と兼りき。役懈怠勝にて奪り出せ後悔もまことと諫ふべきや

佐野報義祿初集卷之二 二五

不届き至極の的們多疾く部索して探さざやと敷園暴く罵懲心と  
 と父出羽介ハ那縛にやと己が室間より出來りて容子を聽より大ま  
 に駭き長嘆しつ云ける様はやよ主水家臣と外口あせそ是皆宿世の  
 業報あらん噫天の哉命ある哉と嘆息しつ奴僕と呼集へ八方に  
 部索して尋ねさせたり茲に譜代の家牒の中に仙八と云る的有け  
 るが至て忠直律義の壮士にて主人出羽介の心に協ひ戰場ふる度  
 々召平より仙八ハ此時駭く中にも脊方方る藪こそ心懸りと潜り  
 入つ探し視るに小藤若竹踏倒して一條の道を開くが如し仙八偕  
 こそと道と傳ひ前向へ川岸まで到りたるが是と顧ふ手係りもや  
 立歸りて主人へ告ぬ出羽介心に思惟様ハ誠や世ハ寡弱の駒と云

俺子あざも鹿十郎ハ天晴一個の英雄へと親の欲目に樂まらるに不測  
 の業病小把合して今や恁る騒動と仕出し生死不定の夙説に懸る  
 必定脊方流川に陸上晴昔の風雨に水炭倍する余水執方に押流  
 されて倘くハ溺死とをけらるん正氣の時にハ是亦の川ハ渠游ぎとる  
 け易なと共那と云にも病乱あれハ平生の処作とハ等しうとせ夏  
 八代川の河遊びより恁あん病症引出せしハ使義厚きに人傷め  
 まどく勇に撓まぬ心氣の勞れり今ハ生中己が病根索む破滅の  
 災釀しとけり跡に残りし兩親同胞有共知で死と前として眞  
 途に到りて悔みやせん備も不便り縛してなりと十悔浮む心の悲心嘆  
 ハ恩愛の別きに腸断如く親の思ひを切ありける出羽介漸心把直

仙八に命じて云ける様ハ汝大儀あが川下に到り浅深を討つて網を  
下し水中得与探し呉ふ俺推量に此川の中に過失て陸込と思  
ふ疾探せよと言度せ仙八も只顧泪と浮めて命せ心得て待ふ  
と準備把急とて網を獲へ奴僕兩三個引平つ。川方を指て走  
出しける右左噪げ共仙八們へ手と空く立歸るふぞ出羽介ハ向悲  
とて原來海方へ流さるふや哀むべしとて。厥ち八音佛事供養  
に夫婦親子共力あつ。世小故的と思ひ詰て後懇心にこそ吊ひけ  
り。然バ狂乱より出て歸らぬ鹿十郎が躬の上るれば誰う余存命と思  
ふ的ぢ。出鳥と命目と思ひ絶へ太理りにも哀れありけり。然程に  
六佐野鹿十郎へ同國隈本の志水村なる野辺の街端小倒し伏

て翌朝己の刻頃まで前後分ちて臥居たり。地ノ農夫們耕に  
出んと五個列にて鋤鍬振擔げ。此処へと來懸りつ。看れば齡若き壯  
士の髪も蓬に振乱して着るる衣服も泥塗まると成素脚にて裾も  
襤げも赤と高射搔て卧けふぞ食不寤思ふ物も呼覚して尋ね  
ようとして前後に倚とらて評し居に追々農持ぎの男們兩個三  
個と立挙りて此時己に大執力と成り。六帝置々と喚き居たり。前立  
くる農夫們ハ鹿十郎も呼覚しけむむくくと起て大欠とあり。眼を  
摺みたり左右と看傳り大きに怒りて云々様ハ汝們那と恚無礼と  
あまや俺と誰とら思ふらん日本鎮西に去的有と呼さる天下無双  
の大勇士なる佐野出羽三男鹿十郎ハ俺と思ふ的も有へ奉寄て



組や大音に響り仁王立にを衝立上る農夫們一同に高英ひ此奴  
 今述つる經文にやさり解せざる絆と云ハ原來狸着う狐着う祠あを  
 の辺に於尿にてもひり懸し故の嗚呼ある的確の備く亦追放一の狂氣  
 ろんむる打棄置と嘲と笑へ若方の農夫們面自りて狂氣あぶ  
 疾引捕へて酒の替り入狂氣水糞坪の中と嗽らせよと掌はく  
 捧追拿て討て懸ると鹿十郎着るより打笑ひ優しき雜兵們の  
 拳止る鐵素捧と太面有平や俺本車と知せんと進寄来る  
 農夫の拿る捧と砲と劍及して右より撃込と引外し左へ電く捧  
 と潜りつ空ぶ成つる掌下と掴めて金剛力に縊上るれば痛みに忍うね把  
 落をも得たりと拾ひて振廻し一撃掌下せ五体痿る不双の大力也

の任せに空地六七個撃倒せしる勢に倉壁易して是ハまさぬドの狂  
 氣やま虚と慢り痰と受る除や圍やと悶きける時一此処へ來懸  
 る人ハ年齢五十七八の武士にて一僕供しを旅装束のぶつさき羽織  
 に脚伴甲懸杖笠拿て通り懸れり農夫們的騷ぎ居けるにや  
 那絆あんと尋ねけま農夫們ハ形が如く告にける此武士聽て  
 打點頭菅笠脱て僕に特せ鹿十郎の傍へ立倚てやよ壯士よく  
 聽ぬ。茲ハ往還の野辺あれば双方地の騷動と成てハ自他の躬  
 上直らるまじ。看れば人品も卑し。由緒有人の子息あらん果思  
 惟仔細も有べ此方茅へ將飯りて姑く留りま田んが你的外に処存も  
 有やと物知らるに尋ね問べ此時鹿十郎面と知らげ。貴殿の様に

曰ふ則ハ然の服も立直さぬ俺ハ今年十八才にて武術ハ諸流秘習  
 練せりと云と彼武士打微笑つ否余術と聽ハ非ぞ亦麼休つ  
 住処ハ那首ありやと問ハ鹿十郎げく打笑ハ然バや俺來る処也知  
 ねハ歸る路も頗に覺へも天より陸より地より出り雨風に誘引  
 茲の即と云ハ此雜兵們こそ兼知ある渠們へ尋ね結へと云放ちて  
 余終ころりと横に卧て手枕として寝懸けよハ彼武士笑と合せて  
 打點頭正根忘る人の住処を尋ね問ハ此方誤りハ那分且同  
 道して歸らん俸僥日中飯料に詰させ割筆と振舞得さ  
 をもべ。此方來られよと列立て傍ら茶店へ引つ食物違ふと  
 勦りハ愁世に鬼ハ無物と云抑此武士奈何多人と云に四國ハ阿

別祥瑞ハ大守也時足利の執權職音川右京大夫頼元の藩臣俸  
 録五百貫と賜ふ処の殿御師範采由と勉めり浮田傳五右門正  
 晴と云人ハ也般主人願ひ上て肥後國阿蘇嶽始り豊前國彦  
 山權現六筑紫太宰府の天神とて參詣せましく思ひ立て遙々  
 四國路より渡海して己に支々詣り序に此辺の様一見せんとして  
 測らざる來るべし傳五右門頗る仁義厚く貧苦病者の的と看  
 れバ平生に是と憐むもの鹿十郎の躬ハ爲体と看て恚ハ救る  
 処あるべし此時浮田傳五右門ハ大勢の農夫と呼集ハ你達備此  
 壯士出処と知由有ハ告結へと云に農夫食々知ぞと答ふ傳五右門再  
 ねて云様此壯士ハ容を視るに甚人品も壯且美男子と着る小袖も平

左野報録加集卷之二  
 六  
 宝文堂藏

民あらず如何も由緒有武士と思ふ俺ハ四國阿州祥瑞城の藩臣浮  
 田傳五右衛門と云武士之譯有て今日罷り通る然るに此壯士狂病ノ  
 爲俸何國ノ人ト知されども余り不便に着受る故棄も置れも思ふ  
 と以俺本國へ將て歸らんと欲も倘ハ壯士の父母親族們此邊尋ね來  
 る人も有バ其許達俺名と能覚て余々々傳へ給へ。假令遠境と  
 隔つて雖も迎ひ小ぶ來る絆あは何時にても違与あんと俺ノ稟ト  
 置る由と達一結つ祝着とべ。何方も馮心稟とぞうと云バ農夫們  
 諾ひつ御憑心心得侍ふと。食々感とて立去に多。恁て浮田傳五  
 右衛門に最早順拜も早る絆也願の目限断る裡に此も疾く歸  
 國せんと忤の鹿十郎と倡引つ己に鳥と經て豊後國佐伯に出で乘船

索め鹿十郎も同船さまに這來傳五右衛門が慈情深く逆ハぬ様  
 に介抱添で食物までも美味と撰と真情竭して列られらるふや前  
 小変りて一度も異れど質朴に順ひ同道して船に乗て狂がれハ主  
 僕ハ思ふより易うりけりとして。打飲びつ日と重ねて終に阿州祥瑞城  
 無事の着船ありとけり是や宥世小契奇縁ある人傳五右衛門  
 ハ茅に帰宅。長の旅路の話を交説次に鹿十郎が躬の上話りて  
 妻子の的も勅らせけま物云絆而已差ふと雖も漫飛出と絆  
 もあくと。二乃室間に閑置俸に帝うつとくと鳥と暮しける。然  
 バ此傳五右衛門に兩個の男子あり。長子と爲十郎正通と云茅  
 と民助正辰と呼り。今年廿一才と十六才に成兄弟劍道の家

五右衛門の長子

二





処人品駐衣服も卑しむも然共泥に塗と頭ハ乱髪一如何様狂乱の侍  
 見ハレ一故農夫に俺住國姓名と告倘汝の一族尋ね來ら傳へ呉すと  
 稟一遺して則ち汝と同道をせり。自夫豊後佐伯に出て乗船し  
 歸國仕るる去年極月中旬の緯へ恁て後余方の病症と俺主家與  
 藥の頭へ乞受治方の医術と索め一処桶伏閑養の二法と施され九二  
 月余り試みる漸余忘吞正念らしく今八十余日と經て本復を如  
 何や猜心清々しく成て人事茲に分明に到り俺云処夢の心地やせん  
 是余方の幸甚にして傳五右門も一人個助る數日の看病功顯る  
 物も俱に歡び千倍するべし。今早余方の躬の上父母親族の許へ飯  
 さん依て尋ねる処るぞと慈情と明とて話説たれば鹿十郎再び駭

とつ且感謝の落涙數行に速ひ少刻ハ哭入て面も得上ぞ心裏にて思惟  
 様へ噫浅椽や耻しや如何ある宿世の業報にて乱心狂人と成つるのぞや  
 父ハ菊池の老臣ある。佐野が後見とも云う躬の二万八千貫ハ武士と産  
 是九洲の地に名と知とある狂病の爲に耻輝しく惑ひ出つる物と思ふ  
 父母同胞まで此躬よりして耻と与へ物と顧へり然にても他家の至人ハ  
 世に有難き仁者にこそ俺躬の爲に命を親之思と云義と云畜ひ  
 と云人も疎し狂男と遠路と厭やを卒歸られて然るまで看病  
 惠まれしるると今思争報し尽されんや殊に父母の名と告あ父母の耻  
 ハ云も勿論之大思戴く菊池の殿まで御名と汚しむ道理あるべし  
 明白に云へまやハ況て恁全快とありると。かめく國元へ立歸り那と

佐野 権 藤 氏 傳 卷 之 二 十 二

手柄顔に人を見参入狂氣の土産譚こそ愈耻の上塗あべ。定めて父  
母此鹿十郎と世に無的とや思ひ給へ玉忠指ふは二月三月と歴々過  
し在と覚へり備津田氏の慈愛に依るは然こそ飢死とも爲べらん是父  
母の縁の放る時葺須弥著海の恩に於てハ父母も浮田も輕重なまし  
難治の業病助る上ハ生涯此人の家牒と成て恩義に報る奉公み  
さば迫ても人の処作を思然と心を決しつ愁を止めて頭と下誠小  
乗は不測の洪恩躬に蒙り終の御話今更謝奉るに  
詞もあ。奈何あれ浩る奇縁にて親にも増る惠と受る躬の幸甚  
ハ生々世々御恩ハ心も稟まへも拙者生國八日向佐土原父ハ炭焼  
と世業とあして十才の頃父母に離き歟ち十五の春よりして去御着

に奉公仕り。廿年己に十八才にて侍ふ名ハ鹿藏と稟侍り。借何日の  
程に恁の如く狂乱の病と成侍ひ。先陸も駿与存侍ね。自今  
國元へ歸り侍て元の主家へ参るとも此仕美るれば手替り有べ。父  
母ハ固より死去されば飯家とて外に侍ら。迫てハ御恩の九牛が一毛  
尊君様へ恩報トとし。永く御下人とあし結ぶ。尚此上の御慈悲  
にて侍ふ。全く御縁の深き故莫大の御情と蒙る。鹿藏が主  
君と仰ぐハ尊君様より外有べ。素素姓と秘して望まける。傳  
五右衛門も深く飲び然も此方と懇望る。俺に於て太満足。主  
役奇縁の結ぶ処。然ハ今日より更めて俺家ハ奴僕とるして目と  
懸忍召仕ひ得さまべ。最も俺に兩個の孩児あり。爲十郎。民助と

佐野 権 藤 氏 傳 卷 之 二 十 二



仙傳集卷之三

室文堂藏

呼る。余方万事世話憑むぞと快く羨引有る。鹿十郎太き。鹿  
 びつ。名々今日より鹿藏と更めて主役因む玉賜把る。園宅一統に  
 ひま。鹿藏夫々恩と謝して終に浮田の奴僕と成て心限も忠  
 引令。鹿藏夫々恩と謝して終に浮田の奴僕と成て心限も忠  
 義と励も茲に早三年此先陸と過し傳五右門夫婦親子の  
 的と服心の郎ホと得し。主従水奥の交ありて尚も慈情を加へ  
 りける。噫義ある哉此鹿十郎一度救る恩に感してさし菊池家  
 の二老臣二万八千貫と賜ふ処の佐野出羽介が子息の躬と病の  
 仇に躬を下りて今終に奴僕奉公して余恩主に仕る義心を  
 忠とや讚ん信とや賞せん。義膽金鉄の心操ハ禄の高下と思へ  
 ぬ処に余清潔ハ見つる昔沛公と翼ハ張良の処作う統くハ

襄退の南帝と佐楠正行の行作にも事耻べざる義勇之然  
 後後に到りて北國小て怨と報して志と遂名と海内小拳とりける  
 も忠義の二心に頭ハも物之備も亦茲に同ド藩中は大館七郎右門  
 義廉と云是も釵道師範とあるあり。俸録三百貫と賜ひし門  
 數多附属あせしが余心さ々甚ぞ奸佞にて彼浮田の清直仁使と  
 碁石此差有が如し依て余門葉の若殿原も属に心して心も分れ  
 大館が一乃弟子ある同藩中此若侍士に橋左近之助と云的有御  
 近習役と勉めたりける俸禄百五十貫と頂戴も此的も彼大館と  
 等く佞悪姦智の生質ゆへ頗る馬の合口あるべし。恁て二日の緝下  
 が左近之助大館の牙に來り一席酒宴の上に於大館七郎右門

高しける夫武士の大志と欲するに興廢天の命と雖も人の魂と利する物ハ  
 名劔の徳と借ざるに於名も拳難く六功も遂む然源氏に鬚切膝丸亦  
 平家に小烏丸あり世以是皆知る処之某平生に之を顧へば哀れ名有  
 処の劔もあぶ得まじ欲する釋多年之茲に二振の名劔と云ハ宅家音川  
 殿の宝劔と朝日丸と号する物こそ世に比類なき二重宝之某是を望む  
 と雖も王家の宝ハ方に速まじ思ふに任せ世間へと云ハ左近之助勝を  
 進めて先生の命せ最も侍ふ誰しも能刀劔ハ得まじ侍へ拙者余藩  
 中に在る未だ朝日丸の由來を知む正宗國吉波平ハ多く武  
 家にハ望も高れども世に此くして看る釋稀之況て宅家の朝日丸  
 ハ誰劔なる名作とも若輩の某傳來兼つども願ふ余由聞せ結

へと問ハ七郎右衛門語りて曰く然ハ宅家朝日丸の來歴ハ九三百年と以  
 前の釋人皇六十六代の帝王條院の御宇と云洛に一個の名劔治  
 あり則ち余名と宗近と云三条通に住ける故に人食三条小劔治宗近と  
 呼余頃同名の劔治三個あり九洲に一個伊賀に一個あり然るに人皇十  
 五代の花山院と稟奉る宝祚總に二年にて御落飾にて遁世  
 ましく圓融院の皇子と以御即位に直し緒帝と條院と稱奉  
 たり儲帝の御聖運守護の爲此時諸卿們詮議をして二振の名  
 劔と劔せんと諸國の劔治を撰まれ多く小劔治宗近に勝る是  
 故に宗近ハ勅劔有けと宗近畏りて奏聞する様ハ恐まじ某丹誠  
 と徹して速まじ劔ハ奉らん茲に二回の奏まる旨あり傳へ聽奥

洲多賀の城跡は昔神龜元年甲子に按察使大野朝臣東人が築きし  
 城廓と兼り傳ふ東夷守り此為唐土より鐵を把寄武器を整へ土中  
 に埋して今上に石牌を建し侍へ是奥洲の石地坪を御城跡の牌を把除  
 て土中の旧き鐵を賜ふ是を地鉄として鍛侍り宗近家秘の鍛術を  
 以名鍛鍛上侍ふべと奏を帝此議を厭感ましく則ち時の武官を  
 りける多田源の滿仲に命せて小鍛治の奏まる肯に任せ多賀の石牌  
 の下に埋し鐵の筋二筋を把寄結ひ馳て宗近賜ひし小鍛治  
 が家の秘術に隨ひ古實を正し鞞を淨め七五三の注連を結びて介躬  
 公齋戒沐浴あて不月に二振の劔を授上之と帝へ厭覽に入る流石と  
 日本に介名の高き宗近心と込て鍛いし火焼又のふむ鎬の模様拔

放ちしる介光りの霜夜の月氷雪の暗と照せる如く身へて耶章  
 莫耶も是に然とと思ふ計りれ名劔あれば帝ハ殊に厭感浅く  
 是時にも御殿へ照込日光の劔に添て輝きし六則ち是と朝日丸と  
 號を依て大内御代々の帝守護劔として藏め結へり備宗近ハ  
 恩賞下さる。劔ち遙先蔭移りて南北兩朝と分れし時音川  
 勝氏等特院殿に隨ひ拔群の軍功と顕はされ尚亦明德三年十  
 月に八南北兩朝御和睦と成音川ハ先君頼之殿。余執結ひを  
 討ハまし。故帝是と賞ト給ふ余りに壹家へ朝日丸と下賜ひ  
 ぬ壹代頼元殿特傳りて家宝第一と尊まらる。此の朝日丸と云ハ則  
 ち是へ依て此七郎右門望む肯意ハ介傳來と曉が故を云つ

蓋と橋へ進めて扇を開きて襟と掻分胸の傍と搦ぎけまば左近之助  
ハ始めて曉る。銀の由來に感伏ありけり。左近之助声頻りて曰く。先  
生然もで処望仕結ふに那謂謀計と巡して密奪せざる処存と  
無やと云ば七郎右門駭きあがり四方と瞻めて膝と進め足下の命  
せ然縛あれども主家の宝と如何を得られん。左近之助打笑ひく  
曰く先生平日の御心にも似合ぬ然程の縛と憚り結る何日望  
とと遂る鳥有んや大功ハ細瑾と顧むとぞ奪ふに那の恐怖  
有ん余手段ハ箇様々と大館の耳に唇と寄て何哉悪計吹  
込けし七郎右門掌と拍て感悦し。儲も妙計奇々々々と尚も  
酒肴と整へさせて橋と餐忘て曰く。足下と勞する処爲あれども

偏に働き憑入と云ば左近之助打點頭て貴殿ハ俺爲の師匠あり。  
師恩報ざるは是ホろ縛一命に替ても勉むべし。先生も手筈と運へ  
結ふ。七郎右門完示打笑て余美ハ氣遣ひ有べらむと。双方閑談  
時とつて終に橋ハ俺身へ降りぬ。徒て大館七郎右門ハ日來う  
望と達せんものと。蜜に心勇と生じて牒合せし鳥と等なる。  
此奸臣們那縛の計らん。于時忘永も早七捨ある頃ハ如月と成  
とりける未と余寒も烈しく覚へる梅花の白ひハ己に過て桃の色を  
梢ハ蒼春霞引山々の帯ハ嬋媚なる女蕩の立容。何國も遠望長  
閑ある心浮々時節あり。豫て討り縛もあれば浮田爲十郎  
の語る来由所へ大館七郎右門出來り。何哉四面八方の譚とあり。

已に夜に入ると歸らざれば浮田爲十郎、困らざるも大館、藩中師範  
 の酌父傳五右衛門、同格と頼ひ彼中あれど敬ひたる、徒然と察し  
 て酒肴と整へ詰り相人に成るる処に大館尚も番所と去ぞ夜に入小  
 雨の降出しけと。今甲夜八足下も打腐きて余寒と酒氣に防ぎ  
 給へと客の方より座と長引せ爲十郎愈迷惑して暫時御免と  
 席と立んと。七郎右衛門、介袂と引留足下俺と乗置給ふ心の疾  
 去りの思ひ召にや。夫の余りの難面存ざる下戸も上戸も明輩好意放  
 ちハせと戯むれを爲十郎ハ頭と搔つ不左様ハ存毛頭侍らぞ。  
 勤番ハ夜廻り済ぬ、那共心懸りに侍ふ此ハ此間退席願ふと  
 云七郎右衛門打笑ひて曰く、平生ハ右もあ左もあ此酒女笑坪の

一會に然外されてハ御術ハ悪一夜に那絆ハ侍ふまゝ御宝藏ハ七  
 重ハ重ハ塗廻り白壁竹垣あり戀の柴垣も他目と厭ひてむさどハ  
 踰難き致あるに半夜盗の忍びどざらんや御勤番ハ上への大法戸鎖  
 ぬ御代に災ハあり率々座して最一盞とて理多く制めて放され爲十郎  
 も詮方あり元の座席ハ押直りて俱ら奴僕而已廻らせて是非多く  
 亦も相人と成太く沈醉仕りけし大館ハ夜半過る刻に席と開き  
 て兵兵つ講唄ふて立歸りく爲十郎も酔に忍まや介伴番所  
 の一室にして横打被きて卧りけり是ぞ介躬の大厄難流浪ハ根  
 とぞ成るる備亦橋左近之助ハ大館七郎右衛門と標合し今夜  
 御宝藏に窺ひ寄り竹垣破りて壁と線拔難多く忍び入て彼是

探し漸宝釵の區着付出して中なる朝日丸を奪ひ拿て得たり  
と後暗多して大館の牙に逢来りて七郎右門に手違与けし七郎  
右門數度頂戴さて足下の賜物辱あしとて三拜多てぞ歡びる左  
近之助の牙に歸りて那知ぬ体にて夜と明しと噫悪むべし此兩個主  
家乃宝と偷と拿て罪と人に譲らんともて極悪非道と嚴ひたり共  
天鏡に羅る躬の罰報の聽てを己に復り來る世利に惑ふて後辨無  
的管ぞ刀劍に躬を破滅もべし人欲甚どりと破家と云正に此大館  
們的縛あるべし己に介翌朝奴僕の躬の朝淨りに到りて看れ御寶  
藏ある脊壁竹垣散々に切壞きて有けるもぞ早速爲十郎へ告と  
告る爲十郎大と仰天一急ぎ走出して展檢するに豈測らんや

御家の重宝朝日丸の名釵の區に空蟬と成て有る爲十郎へ言在氣  
の如く庫中へか論へ此処彼処と介坪の内と尋ね廻り六走歸りて狼  
狼惑ふに切穿ちたる穴の傍に介躬の外失ひたり一固の釣匙落  
て有るべし是亦不測と思ふ處へ橋左近之助の出仕の時節爲十郎の  
空日子と看んとて己が処爲と素知ぬ顔にて此処へと來懸りつ大に  
駭かざる体とありて噫手滑りごとと肩と擧め故意空日子を尋  
ねんとし是ハ氣の毒千萬と私言る爲十郎へ向途方に暮橋氏  
御前宣く憑と入と面目あげに聞へけし左近之助の折点頭  
御馴染甲斐に悪く稟さむ併あが御釵乃紛失正に賊徒の処爲  
と看ゆしハ和殿覺悟の致さるべし御役油断へ何とも早稟さむの執

左近之助の御前宣く憑と入と面目あげに聞へけし左近之助の折点頭

御馴染甲斐に悪く稟さむ併あが御釵乃紛失正に賊徒の処爲



成に御前思召討ひ難しと心着き真綿の針詞唆しと駐退  
夕に御殿とさして立去る者も此時を城に音川頼元殿の御息男  
左金吾満元と直稟して御若殿在城致されりける大殿頼元は去つ頃  
より先考頼之殿の逝去後二代の管領職に任ぜられ斯波畠山と諸  
俱に室町柳營と御執政少本國へ曾て歸られども阿讃兩國の  
政事に於て老職長盛藏人へ討らせ若殿満元の補佐を命ぜらる老  
職長盛忠良の人にて有べ上と敬ひ下と憐み君と泰山の易きに奉  
りて理法權の三と正しく國內穩に守護けし頼元安心と在京  
仕給ふ然程に橋元近之助八御宝藏夜盗の傳未宝劔掠奪せし  
爲侍と早速若殿へ言上せし満元殊の外怒り結ひ老職長盛

藏人と召れて此趣きと話し給ひ朝日丸八天子より下さる名劔と夫と倣初  
にも賊の処爲に奪把れと聞ゆ則禁裏征夷へ恐も多し急ぎ目通  
り爲十郎と召方稟一度して召出まべし自ら糺明遂て介罪知  
せんと憤り結ふ藏人も大まに駭きて是へ忌々し珍事仕出しけりと  
深く心配せられ共君命是非多く畏りて邸座に爲十郎と呼出しぬ  
満元居丈高に曰ひ多るやと不忠者奈何心得るや予家千載の誓  
れと成し朝日丸の名劔に於て祖父頼之殿より特傳る天子頂戴の  
至宝ある汝役中の懈怠ありて偷ませると聞ゆる則て至家奈何様  
の御外あり有ん殊に父君御在京に留至諸事異變あり守護を  
べき処に存外の仕越不届き至極し稟し開きの證據も有や奈何

左様御前思召討ひ難しと心着き真綿の針詞唆しと駐退

く責問給へ爲十郎ハ恐惶とつ薦席に平伏て直平ける息ひか  
けなき此躬の不調法今と成て言上ノ條も侍ふ實不測に存侍ふ  
緋に某日外より矢ひ侍ふ処の釣匙一挺落しとれ有自丈外に證據  
らし品ハ吟味仕と共看む侍ふ宝釵奪つ侍ふ上ハ如何様ハ御刑  
罪と蒙る共有難く御請稟し奉る覚悟極めて言上まれば満元愈  
怒に得忍む致圍暴く命せざるハ己が失ひ品を以證據呼はり甚ど  
不審胡乱の返答奇怪なり去手討にありて遣さん其処を銀と目  
つ扈從に持せし御佩刀と拿拔打に斬着んと仕給ふ老職長盛  
藏人走り侍御堂下と留めて稟しける御立服ハ御最もに存ト  
奉る然るも當今爲十郎とハ時御怒りに乗せられて御手討に

遊む共失たら宝釵出るにも非づ此釋未だ世間ハ風説流を  
と云にも侍らむ藩中の外ハ知れぬも罪名有とい稟し  
が爲十郎ハ御鎰領りの介職分かれ朝日乃詮議に於  
ハ則ち爲十郎の役目之恐まら御賢慮巡され某爲  
十郎が二命を暫く御領け結らざるハ危度吟味を  
仕り侍らん男御佩刀をい収め結入藏人が一固乃御願  
ひみ待ふ哀き御聞届け下さる様偏に希ひ奉ると  
宵めける若殿満元命せざる藏人の諫め然釋られど  
も父君への稟し譯と云此縛朝廷も聴へる下  
音川の家にるべし汝此肯奈何計と問る長成置藏  
人稟しける様恐れらる世間風説を仕るとの君より

余御届け是る御家に抱る議待を防へ  
 如老待と七固より大殿乃御耳にも藏人に於て討  
 へ菓さず職詮鑿して把返し再び宝藏へ移む不到  
 ば却て謝る者に倍く侍ふ御賢慮如何と首へれ満  
 元此一御面を和まて上乃処隱便乃肯意汝乃妙存  
 子任すけ共爲十郎にバ了簡而を以後一藩中の  
 心得乃爲速に切服を菓一付て余方介借か七把  
 突べ一猶豫ハ嚴るるをと命せられ爲十郎を胸付給ひ  
 て衛と奥殿へせ給ぬ尤近之助ハ先刻より空嘯きて聽  
 居たりか仕沁しと心に笑て舌掌摺七殿に属ひ

俱にぞ引添入り長盛藏人打面沾まら爲十郎と  
 尉心謙して引立て同道をせぬ終に御殿を退出し  
 俺弟に立帰りしが殿より預り乃罪人るれバ爲十郎之  
 一室に閃火急に諸藩中觸度七宝庫夜盜  
 乃一件に於ハ一言一句も口外去るか老猶此藏命に嫌  
 る的あつて急度曲事宣示し付るを残去觸廻して  
 押へも早竟浮田爲十郎が後乃上藏人奈何討ふ  
 や否や次の面に説分を省籍へ

繪本佐野報義禄初集卷之二

佐野報義禄初集卷之二

宝蔵藏人